

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

季刊 全国エッセイ誌『ふるさと紀行』32年間の歩み ～東京から山口の里山へ、そして全国へ発信～

畑山 静 枝（『ふるさと紀行』編集長）

『ふるさと紀行』が東京のど真ん中で産声を挙げたのは、昭和55年の春のこと、東京で出版印刷業を営む佐伯清美さんが、〈ふるさとの、古き佳き美しきものを、書き、語り、遺そう！〉のメインテーマのもと、47都道府県、全ての県からエッセイストを募り、季刊全国エッセイ誌として創刊した。

しかし、創刊号はたったの8県のエッセイストによる薄い小冊子で、その他の県は白紙状態という、一風変わった本としての出発だった。口の悪い友人から、「3号まで持てばいい方だ」と言われたエピソードが残っている。



▲ 「ふるさと紀行」創刊準備号

佐伯さんは、昭和4年、岩国市の美和町で生まれ、13歳で自らの生き方として、ふるさとを離れて山口県庁の給仕をしながら苦学し、さらに向学心に燃えてその後上京、日本大学芸術学部に入學、後に映画監督になった深作欣二氏らとシナリオ作家を目指して芸術活動をしていましたが、孤立無援の東京砂漠の中で、生活の自立のため印刷出版会社を創立した。そして、出奔したふるさとへの郷愁と、文学への熱望から、この『ふるさと紀行』の創刊を思い立ったという。

白紙のページを埋めるために、佐伯さんは暇をみては全国行脚し、その県の文筆家の掘り起こしに努力した。その甲斐あって、10年目にして47都道府県全ての県からのエッセイ掲載と言う、長年の悲願を達成した。

昭和60年代、佐伯さんはバブルがはじけて、経営が困難になったときでも、この『ふるさと紀行』だけは必死で守り抜いて来た。その姿勢に賛同した全国の愛読者は多く、いまだに創刊時から読み続けている人たちもたくさんいる。

私もその中の一人で、後にわかったのだが、なんと、定期購読者第一号がこの私だったとか。私と佐伯さんは、県詩選の詩友として、40年前に宇部での大会で出会ったのが、そもそものきっかけである。私は、愛読者のひとりとして、未完成とも言えるこの白紙の多い本の行く末に興味と関心を抱き、たまにはエッセイを投稿しながら、ずーっと読み続けた。そしていつしか、読者から編集者になりたい夢が私の中で膨らみ始めたのである。

佐伯さんは、これまでふるさとに背を向けて来たことへの自責の念から、老後は山口県のどこかの里山で、その再生活動をして、なにがしかの恩返しをしたいと思っていたところ、出身校である山口県鴻城高等学校の小田稷亮理事長さんから、



▲ 設立25周年懇談会の折の畑山さん

荒れた山林の再生活用を託されたので、平成7年、64歳の時、小郡郊外の桂谷集落に初めて足を踏み入れた。それから、ふるさと紀行の全国の愛読者に支援を呼び掛け、里山活動の拠点となるログハウス第1号がボランティアの手によって完成したのは、平成12年、実に4年半もかかったのである。そして、本格的に活動するため、70歳の時、50年の東京生活にピリオドを打ち、編集部も東京から里山に移した。20周年、30周年の節目には、愛読者の全国大会なども里山で開催した。その30周年の時、佐伯さんは、長年勤めて来た編集長の役目を降りて、今度はこの私が後任を引き継いだ。まさに、私にとって、夢が実現した瞬間であった。編集長を引き継いだと言っても、まだ未熟者の私である、いろいろと厳しい指導を受けているのは言うまでもない。

今の課題は、長年の愛読者、執筆者が高齢となり、やむを得ず本誌から去って行く現状を見るにつけ、活字離れの進む若い世代に、なんとか関心を持ってもらい、書くことの大切さや喜びを味わってもらえるよう、編集にもひと工夫し、魅力ある本作りをして行かなければならないということである。

四季の美しさに恵まれた、この日本に生まれ育ったことに感謝し、そして、この貴重な季刊エッセイ誌を編む喜びを噛みしめながら――。



▲ 現在の「ふるさと紀行」

嘉村礒多生家『帰郷庵』でふるさとの味を

園田純子 (山口県立大学看護栄養学部栄養学科講師)

ちょうど1年前、このセンターだよりでお伝えしたように、本学看護栄養学部栄養学科調理学研究室では、昨年度、嘉村礒多生家『帰郷庵』を活用した食育プログラム作りに取り組みました。『帰郷庵』での体験イベントを当施設の指定管理者と仁保むらづくり推進協議会が企画するにあたり、協力の要請を受けたことがきっかけでした。

地域社会との共生をめざしている本学にとって、このようなフィールドを与えていただいたことは、学生にとっても大きな学びの機会となりました。また、食の専門家をめざす栄養学科の学生が参加することにより、食についての知識やスキルが活かされ、イベントに新たな若者の視点を加えることもできたのではないかと思います。



▲ 帰郷庵での茶摘み



▲ 学生が担当した食育ミニ講座の様子

昨年度、私たちが支援を行ったイベントは次のとおりです。右の欄に挙げているのは『帰郷庵』でのイベントで参加者へ提供した料理です。

平成23年度 支援した帰郷庵での食体験イベントと提供料理

4月23日(土)	「よもぎ餅づくりと田舎のバラ寿司づくり」	バラ寿司・よもぎ餅・漬物
5月7日(土)	「たけのご掘りと山菜を味わう会」	おにぎり・山菜の天ぷら(16種類)
5月22日(日)	「番茶作りと茶がゆを味わう会」	茶粥・あまごの塩焼き・ふきと椎茸の煮物・胡麻和え・漬物
6月25日(土)	「らっきょう掘りとらっきょう漬け作り体験」	おにぎり・漬物・らっきょう漬け
7月23日(土)	「仁保川上流の清流でアユのつかみどり」	ごはん・鮎の塩焼き・ちしなます・味噌汁・漬物
8月20日(土)	「そばの種まきと鶏を食べる会」	ごはん・鶏の串焼き・鶏の煮物・味噌汁・漬物
9月3日(土)	「漬け物作り」	ごはん・きゅうりの酢の物・そうめん汁・漬物
10月30日(日)	「そばの刈り取りと石臼での製粉体験」	ごはん・そば粉のガレット・柿なます・味噌汁・漬物

イベントのプログラム作りとともに、私たちが活動の大きな柱として取り組んだのが、地域の食文化を記録に残すことです。地域の食材や昔からの料理に着目し、聞き取り調査や調理時の詳細な記録を行い、「仁保の伝承料理」としてレシピカードを作成しました。料理の選定には、一部磯多の全集から食材や料理を抽出し参考にしました。なお、このレシピカードは『帰郷庵』にも置いてありますので、時間利用時や宿泊の際、利用者が自分で作ることができます。季節に合わせて伝承料理を組み合わせれば、四季それぞれで磯多のふるさとの味を楽しんでいただけたらと思います。

昨年11月24日には研究室の活動報告会を兼ね、伝承料理モデル献立のお披露目をしました。磯多は『柿』と題した小説も残しており、柿への想い入れが強いようでしたので、『帰郷庵』の庭に実った柿を使って「柿なます」を調理し、秋の献立に加えました。このモデル献立は、『帰郷庵』の蔵に保管されていた高坏膳にのせて提供いたしました。



▲ 試食会の様子



▲ 秋の献立：ちらしずし・鶏の煮物・柿なます・里芋の味噌汁

食の体験イベントは、本年度もさまざまな内容で企画されています。是非、嘉村磯多生家『帰郷庵』で、磯多に思いをはせ、磯多のふるさと仁保の伝承料理に舌鼓を打ってみませんか？ また、幅広い年齢層で体験できる食育プログラムも用意しています。今後も、たくさんの方々に帰郷庵を利用していただきたいと願っています。

寄贈図書 (2011年12月～2012年4月)

浜崎勢津子『生の軌跡』(株式会社マルニ、2011)・朝比奈敦『家族の行方』(鳥影社、2011)市来白水『句集花こぼし』(文學の森、2012)・大谷房代『詩句集乙女椿』(やまびこ出版、2012)・近藤正一『韓国旅日記韓国の古代に倭国をのぞく』(文芸社、2011)・山口大学人文学部『山口大学所蔵和漢古典籍分類目録』(三共印刷、2011)・平山智昭『秘話歴史物語夫殺され毛利輝元の側室にさせられた二の丸様の子秀就公その誕生の謎を解く』(ふるさと紀行編集部、2009)・平山智昭『長門小野の里に骨を埋めた豊後竹田の岡城主志賀親次の生涯』(ふるさと紀行編集部、2012)

寄贈雑誌 (2011年12月～2012年4月)

『あらつち』第62巻10～12、第63巻1～3(675～680)(あらつち社事務局)・『嘉村儀多顕彰会だより』創刊号(嘉村儀多顕彰会)・『地橙孫新聞』第7号(兼崎地橙孫顕彰会)・『香藹人』VOL.19(香藹人短歌会)・『其桃』第803～809号(其桃発行所)・『和海藻』第27号(豊北郷土文化友の会)・『中原中也記念館』館報第17号(中原中也記念館)・『廳』第88～89号(廳事務局)・『風響樹』VOL.41(風響樹同人)・『ふるさと紀行』平成23年冬の号(第128号)、平成24年春の号(第129号)(ふるさと紀行編集部)・『〔11現代山口県詩選〕(山口県詩人懇話会)・『文芸山口』第300号記念号～302号(山口県文芸懇話会)・『山彦』VOL.107～109(山彦発行所)

【郷土文学資料センター設立25周年記念懇談会 開催のご報告】



昨年11月10日に、設立25周年の記念行事として、県下の顕彰会や雑誌の編集長の方々を学内外から13名お招きし、懇談会を催しました。このような試みは当センターとして初めてのことでしたが、郷土文学の貴重な絆の場となりました。ご出席くださった関係者の皆様に、この場を借りて改めて感謝申し上げます。今後いっそう、当センターが郷土文学をつなぐ「場」になれるよう努力していきたいと思っております。



編集後記

▼センターだより19号をお届けします。▼巻頭には、『ふるさと紀行』編集長の畑山静枝氏に、雑誌の誕生から現在までの様々な逸話をお寄せいただきました。上記の懇談会が新たな縁となりこのような機会につながりました。『ふるさと紀行』の最大の特徴・魅力は、全国誌という点にあり、この春で通巻129号を数えますが、これまで、佐伯清美氏と畑山氏の二人三脚で、雑誌を大切に育てられてきた歴史がよく分かります。心よりお礼を申し上げます。▼本学看護学部栄養学科の園田純子先生には、前々号でご執筆いただいた『帰郷庵』を活用した食育プログラム作りについて、より具体的なお報告をいただきました。誌面では見るだけになってしまうのが残念ですが、とてもおもしろい、そして栄養のある献立で、郷土文学と食育の楽しいコラボレーションとなりました。本誌に、まさに彩りを揃えてくださり、まことにありがとうございます。▼図らずも、今号の記事に共通して「ふるさと」という言葉があります。今後もこうした郷土の活動を紹介していければと思っております。▼本誌18号(2010年11月発行)の稲生慧氏「河上徹太郎と図書館」において、「黒田清輝」とあるのは、「花田清輝」の間違いです。ここに訂正させていただきます。▼次号は、本学卒業生を中心にご執筆いただく予定です。11月刊行を目指しています。(K)



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜島3-2-1)
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2012(平成24)年5月30日